

一九五〇年代通俗文芸の興亡

——趙樹理『三里湾』の出版を中心に——

櫻尾季美

【一】はじめに——小説『三里湾』の発表を巡って——

趙樹理の小説『三里湾』は一九五五年五月通俗読物出版社から出版された。その売れ行きを尋ねた友人に、彼は次のような言葉を洩らしている。

我要是為了收入多、就送到人民文学出版社了。現在送到通俗読物出版社出版為了銷行広、只要広大農民看到這本書、我是不顧及稿費多少的！

「もしより多くの収入を望むのなら、人民文学出版社に（原稿を）送っただろう、今回は通俗読物出版社に送って出版することにしたのは、販路が広いからで、多くの農民がこの本を読んでくれさえすれば、原稿料がいくらだって私には構わないのだ！」⁽¹⁾

趙樹理（チャオ・シューリー 一九〇六一—一九七〇）は解放区における大ベストセラーとなった『小二黑結婚』（一九四三）

の発表後、「李有才板話」「登記」などと続く一連の作品で、「文芸講話」の体現者とまで評され、「人民文学」の代表的作家として広く知られるようになった。自らを「助業作家」つまり、彼が自分の本業と考えていた農村工作を「助」けるために筆をとる作家と任じていた彼は、創作談や作家としての体験談などを問われれば語るといふ形で、断片的に残してはいるものの、創作に関する詳細な記録などはほとんど無い。まして出版に際しての要望を語った冒頭に引いたような発言は、極めて稀であり、それゆえに片言隻句とは言え、看過できない重みを感じさせるのである。しかも、この発言は当時の出版社と作家の関係、出版社間の関係、農村文芸等をめぐり微妙な問題が存在していたことを示唆している。

まずこの作品が発表されるまでの経緯を整理することから始めよう。中篇小説『三里湾』は、最初一九五五年一月から三期にわたって『人民文学』誌上に連載された。連載終了後には人民文学出版社から単行本として出版される予定であった⁽²⁾というが、実際には前述の引用部分にあるとおり、通俗読物出版社という耳慣れぬ名前の出版社から単行本として世にだされることになった。一九五五年五月、連載終了の僅か一ヶ月後のことである。

出版社の変更が問題化することもなく、『三里湾』が平穩に出版されたのは、それがとるに足らぬ些細なことだったからなのだろうか。それにしても一旦与えた約言を取り消してまで他の、しかも無名の新興出版社に自著の刊行を委ねた趙樹理の行動は、現代の我々の目にも些か奇異に映る。人民文学出版社と通俗読物出版社、そして作家、趙樹理、この三者の間にどのような思惑や力が働いていたのか、そしてまた一般的にこの時期の出版社と作家の間にはどのような関係があったのだろうか。まずは人民文学出版社の周辺からこの問題への糸口を探してみたい。

【三】 人民文学出版社の影

杜鵬程著『保衛延安』（人民文学出版社一九五四年刊行）⁽³⁾は国共内戦時期の延安攻防戦の様子を描いた長編である。

著者の杜鵬程は、もと新華社の記者で執筆当時まだ無名の作家だった。実はこの小説も単行本として出版されるまでに、些か込み入った事情を抱えていた。

さて杜鵬程の回想によれば、「出版するだけの話なら、総政文化部はそれ（『保衛延安』*引用者注）を『解放軍文芸叢書』の一冊として、既に出版を決めていた」しかし、杜は作家として「この本が中国文学に何かをもたらすのか」ということを知りたくて関係者数名を訪ね、最終的には当時人民出版社社長を務めていた馮雪峰に原稿を送り、再三の訪問を試みる。⁽⁴⁾ 運良く馮雪峰の高い評価を受け、大幅な修正を経て、人民文学出版社では当時において、又新人作家としてはかなりの大部といえる五十三万部強を刷り、大々的に売り出した。副社長の樓適夷はその経緯について次のように書いている。

它原来是某叢書編集部的退稿，作者心不甘服，就找雪峰，卻被雪峰一口肯定，給予高的評價，經過整修而決定出版的。那時某叢書的主持人才着了急，打來一個緊急電話，要我社在出版時，封面上必須印上某叢書的名義。作者早對出版社說過不願這樣作，我当然是同情作者的，覺得這位主持人出爾反爾，態度有点不正，就在電話中加以拒絕。對方声色俱厲地說「這作者就是我們培養出來的，所以必須用我們『文芸叢書』的名字。」我的回答很不客氣「我們是國家出版社，你們也是屬於國家的嘛！這一下不得了，只聽到電話筒狠狠地摔了下來，再也聽到一句回言了。這是我到出版社以後，所鬧的第一場禍。最後還是雪峰出面陪禮道歉，而『保衛延安』的初版上，還是加上那塊「叢書」的招牌。

それ（『保衛延安』*引用者注）はそもそも某叢書編集部から却下された原稿だったが、作者はそれを不服として馮雪峰を訪ねたところ、馮雪峰は即座にこれを支持し、高い評価を与えて全面的に修正してから、出版することを決めた。その時某叢書の責任者は、慌てて急ぎの電話をよこし、我社が出版する際に、表紙に某叢書の名前を必ず印刷するようにと言ってきた。作者は以前から出版社にそうしたくないと言っていたので、私は当然作者に同情して、その責任

者が自分で原稿を断つたのに今又それを返せとは、態度が宜しくないと思ひ、その電話で申し出を断つた。先方は厭しい調子で「この作家は我々が育ててきたのだから、我々の『文芸叢書』の名前を使うべきだ」と言つた。私の答えは不躰だつた。「我々は国家の出版社だ。貴方たちも国家に属する出版社でしょう！」この言葉はきいたようで、受話器を憎憎しげにぶつける音が聞こえてきただけで、一言の返事も聞かれなかつた。これは私が出版社に移つてから引き起こした最初の騒動だつた。結局やはり雪峰が出て来て札を尽くして詫びをいれたが、『保衛延安』の初版には、やはり例の『叢書』の看板を付け加えなければならなかつた。⁽⁵⁾

些か引用が長くなつたが、楼適夷が「某叢書」としているのは、実際には『解放軍文芸叢書』であり、中央人民政府軍事委員会総政治部（総政）文化部がその出版に関与していたことが杜の文章から看取される。人民文学出版社が『保衛延安』の版權は譲らないまでも、先方の求めによりその叢書名を表紙に付け加えることを余儀なくされたという点で、両者の微妙な力関係は興味深いが、それははさておき、杜鵬程は趙樹理とは逆に、以前から付き合ひのあつた出版社を離れて人民文学出版社から自著を出版したという事実がここから読み取れよう。

引用部分を比較すると、ややくいちがう点も無いではない。杜は最初から「出版は決定していた」といい、楼は「原稿は退けられたものだった」と記している。どちらの記憶が正しいのか、現時点では残念ながら検証しようもないが、ともあれ、ここで注目すべきは杜が自著の出版に関して、従前に契約していた出版社ではなく、「自分の作品が中国文学に何かをもたらすものかどうか」（傍点は引用者による）を測るために「人民文学出版社」に原稿を持ち込み、そこからの出版を望んだという点にある。別の言葉で言えば、杜は新中国の文壇にその名を記すために、敢えて「人民文学出版社」から自著の刊行を希望したのである。

当時既に人民文学出版社は出版界における単なる選択肢の一つではなく、何らかの記号性を帯びた存在だつたとい

うことが、若い作家の行動の背景にはつきりと見てとれる。逆にこの出版社に背を向けた趙樹理の行動は、彼がそれを意識していたかどうかにかかわらず、この記号を自らの作品から外そうとしていたということを暗示しているのではないだろうか。

人民文学出版社は一九五一年初に成立している。初代人民文学出版社長の馮雪峰は、ここで特に指摘するまでも無く、三十年代から文名を馳せた、生え抜きの党老幹部であるが、同時に周囲のものが彼に畏敬の念を払うのは新中国で神聖視された作家、魯迅とのつながりによる所が大きい。

人民文学出版社に招かれるまで、彼は古巣である上海で中華全国文芸工作者協会（文協）上海支部の主席を勤め、同時に一九五〇年に設立された魯迅著作編刊社で『魯迅日記』と『魯迅全集』の編集を行っていた。しかし、馮雪峰の北京への転任に伴い、魯迅編刊社はその主要なスタッフと共に北京に移転し、人民文学出版社の一部門としてその業務を継続することになる。⁽⁶⁾ 馮社長の人事が、現代文学の最高の經典とも言うべき『魯迅全集』刊行という一大プロジェクトの取り込みまでを念頭においたものだったとは思えないが、しかし、彼を初代社長に据えることで、人民文学出版社はその背後に魯迅の威光をも纏うことができたのは事実であろう。

出版社は、党の文芸政策の実行機関として、宣伝部、出版総署の管理下に置かれていた。杜鵬程のような若い文学者にイメージの上での權威を植え付けただけではなく、そうした党との直接的なつながりは、老大家と呼ばれる作家にも無視できない影響力を感じさせていたのではないだろうか。二代目社長を務めた樓適夷は自らの同社での経験を次のように語っている。

可是回想起来、作為一個編集、在工作上、自己所發揮的權力、也是有点可怕的。我們好像一個外科大夫、一枝筆像一把手術刀、喜歡在作家的作品上動動刀子、彷彿不給文章割出一點血來、就算沒有尽到自己的責任。這把厲害的刀、

一直動到既成老作家、甚至已故作家的身上。(中略) 郭老『女神』解放後の第一新版、就給刪去了三首小詩、(中略) 茅公的『蝕』『子夜』說有些描写認為是「黃」了一点・曹禹的『雷雨』『日出』、都是被動過手術的(中略) 当然、編集部是当作意見向作者委婉提出協商的、而作者則無不遵命、一律照辦。

しかし思い返すと、一人の編集者として仕事の上で自身が發揮してきた権力はやはり少しばかり恐ろしいものだった。我々はちょうど外科医で、ペンは手術用のメスのようなもの、作家の作品の上でメスをふるい、文章を切り裂いて血を流さないと自分の責任を全うしなかつたように感じたものだ。この恐ろしいメスは既成の老大家たち、時には既に故人となつた作家たち⁽⁷⁾にまで及んだ。(中略) 郭翁の『女神』の解放後の第一新版では三首の短詩を削除した。(中略) 茅先生の『蝕』『子夜』も一部の描写がややエロティックであると認められたし、曹禹の『雷雨』『日出』も全て手術を受けた。(中略) 勿論編集部は意見として作者に婉曲に協議を持ちかけるのだが、作者のほうは一人として従わな⁽⁷⁾いものは無く、全て言うとおりにするのだった。

こうした出版社の影響力が一人趙樹理にのみ及ばなかつたとは考え難い。現に彼は回想記の中で述べている通り、『三里湾』の執筆前、「人の心を震わすような作品が書けない」と党宣伝部に配置換えされ、そこで胡喬木から直々に手本とすべき選定図書を与えられ、学習の日々を送っていたのだ。⁽⁸⁾ 創作への批判や間接的な指導を経験した彼が、こうした周辺の状況に無頓着であつたとは考えにくい。その上で敢えて人民文学出版社を避けたのであれば、そこには彼なりの矜持があつたとしか考えられない。また文壇に上ろうと人民文学に近づいた杜鵬程とは反対に、そこから離れようとした趙樹理は文壇作家たちとの文学観の相違や、活動の上での摩擦を強く意識していたふしもある。

五〇年代初め趙樹理が主筆を勤めた大衆文芸創作研究会と丁玲、陳企霞等を中心とした中華全国文学工作者協会(以下「文協」とする。後に「作家協会」に改称)とは、それぞれの本部が東総布胡同、西総布胡同に分かれて置かれていた。

一九四九年十月に発足した大衆文芸創作研究会は、翌五十年秋に成立一周年記念集会を開いたが、その席上ちよつとした事件が起きたという。丁玲が発足祝賀の講話の中で大衆文芸創作の一定の実績を評価しながらも「けれどもやはり人民大衆に僅かながら良くないものももたらした。我々は量で質に勝ることはできない。我々は再び人民に窩窩頭を与えることはできない、彼等にパンを食べさせねばならないのだ。」という趣旨のことを述べた上、さらに、自作のスターリン文学賞受賞を喧伝し、大衆文芸創作研究会のメンバーであり、趙樹理とも近い苗培時の作品への批判を行った。名指しで批判された苗培時は机を叩いて抗議し、趙樹理がなだめに入ったといふ。⁽⁹⁾

文協は中華全国文学芸術界連合会の下部組織であり、職業作家の集う、新中国に於ける文壇の代名詞といつてもよい場であつた。それに対して大衆文芸研究会はといえば、当時のメンバーの一人だつた馬烽はその様子を次のように述べている。

在中共北京市委領導下、成立了一個老舍、趙樹理為首的「大衆文芸創作研究会」、我也是其中的一員。這個研究会不僅有從解放区和國統區來的從事大衆化創作的新老作家、同時還有許多原來就在北京寫章回體小說以及從事曲藝、評書的藝人。大家利用業餘時間、在一起學習政治、探討業務互相取長補短、共同提高、起了很好的作用。

中國共產黨北京市委員會的指導の下、老舍、趙樹理をリーダーとした「大衆文芸創作研究会」が成立した。私もその中の一員だつた。この研究会は解放区と國統区からやってきた大衆化創作に従事する新旧の作家だけではなく、同時に北京土着の章回體小説を書いていた人や、曲藝や評書に従事していた芸人もいた。みんなは仕事の合間の時間を利用して、共に政治學習をしたり、仕事を検討してお互いにその長所を学びあい、短所を補つて、共に向上し、大變よい効果をあげた。⁽¹⁰⁾

工農兵のための新たな文学形式を模索する人々の取り組みが意欲的に行なわれていたことが伝わってくるが、しかしながら、丁玲に代表される新文学の担い手たちが、「章回体小説家や曲芸、評書芸人」までが一緒になったこの集団をどのように見ていたかは想像に難くない。パンと「窩窩頭」の比喻にもこうした作家たちの偽らざる気持ちが現れているのだろう。

公開の場での前出のような衝突に加え、新聞の文芸欄では互いの組織の作家に対して批判が行われていた。事態の深刻化を懸念した周揚は双方の代表を呼び、以後セクト争いは避け、公開での批判を控えるよう勧告した。双方の本部の所在地名に因み、この事件は「東西綫布胡同會議」と呼ばれている。⁽¹⁾

このように趙が『三里湾』の出版を機に見せた選択の背後には、彼自身の言葉どおり、広汎な読者に手軽に読んでもらいたいという積極的な希望は勿論だが、従来からの既成文学者との前述のような軋轢から生じる鬱屈、「通俗読物」に重点をおく新しい出版社への期待などが複雑に絡み合っていたと推測される。しかし、それらは全て趙樹理の個人的な意思であり、彼のこうしたエゴがすんなり通るほど、当時の出版行政の規制は甘く緩やかだっただろうか。彼の選択が柔軟に受け入れられた背後には、何か通俗文芸を巡る社会の大きな流れが関わっていたと考えるべきではないのだろうか。

こうした疑問を抱きながら、趙樹理が『三里湾』を託した通俗読物出版社へと視線を転じてみたい。

【四】通俗読物出版社とは

趙樹理と直接交渉し出版を承諾させた通俗読物出版社の当時の編集者、楊百鏞は回想記の中で次のように語っている。大学卒業後すぐ通俗読物出版社に配属された楊は、一九五四年のある日、著名な作家である趙樹理の寓居を訪ねる。趙樹理は彼の来訪を温かく迎え、同じく作家の苗培時を紹介した。楊は二人の作家に通俗読物出版社について、最近

設立されたばかりの、工農兵、中でも農民に重点をおいて本を出す国家級の出版社であると説明している。

二人の作家の好意的な様子を見て、彼は本にできる原稿があれば申し受けたいと来訪の意を伝える。「三里湾」が『人民文学』に近々掲載される予定であることを聞くと、連載終了後には、ぜひとも自分の出版社で単行本化させて欲しいと楊は懇請する。趙樹理は「そのことは適夷同志ともう話しを決めてしまったから」と一旦は断るが、同席の苗培時の説得と楊の懇請により、趙樹理も漸く出版を任せることに同意したという。⁽¹²⁾

現在農民経過掃盲有了文化、迫切需要書看、如果給我們出版、印数大、出書快、可以很快発行到農村、送到農民手里。現在農民は掃盲（運動）を経て教養を持つようになり、読む本が差し迫って必要なのです。もし我々に出版させてくれるのであれば、出版部数も多く、早急に出版するようにします。農村に早く配本して、農民の手に届けられます。⁽¹³⁾

その後はこの楊の言葉どおり、『三里湾』は『人民文学』誌上での連載を終えた翌月の五月に早くも単行本の印刷が完了し、配本に回された。その早さには趙樹理も驚いたという。「値段は安く、そのために原稿料を削ってもかまわないから」という趙の言葉を尊重し、定価は〇・五七元とされた。ちなみにこの『三里湾』は一九五八年人民文学出版社から再版されている。同じ版型を用い重版したと表紙の内側に断りが記されているが、ハードカバーで価格は一・五五元。これは通俗読物社五五年版の約三倍である。

しかし楊百鏞の回想には尚幾つか不明瞭な点がある。果たして、人民文学出版社は原稿を快く譲渡したのだろうか。交渉にあたった編集者の態度にしても、新興の出版社には似合わぬ自信の程が見られる。近年中国では出版史関連の資料が多く公開され、このような回想記の類も少なくない。しかし、この通俗読物出版社に関しては残念ながら他に確たる証言は見つからなかった。ただ、興味深いのは、中央宣伝部、文化部といった直接に出版政策を企画立案した人々

の手になる档案資料の中に、五三年ごろからこの出版社の名前が頻繁に出てくることである

通俗読物出版社の名がこれらの史料の上で認められるのは、管見では中央宣伝部発の「関于中央通俗読物出版社如何成立等問題電復陳克寒的詢問」(一九五三年四月八日)⁽¹⁴⁾が最初である。この文書では通俗読物出版社成立のための人員の手当てなど具体的な提案がなされている。『全国総書目』⁽¹⁵⁾は年度ごとに刊行された図書の目録として、実際に発行された本の部数や価格を照会するのに便利だが、試みにその第一巻(一九四九年から一九五三年)の「第十項：文学」の項目中、「中国大衆文学・通俗文芸」の欄を開くと、通俗読物出版社編『動腦筋找竅門』(〇・〇六元。一九五三年十一月)という書名の記録が見られ、これがこの欄で通俗読物出版社の名前が見られる最初の例である。さらに「第四項：経済学、政治経済学与経済政策」には同社編集による『農業生産互助合作教材(修訂本)』があり、これは一九五二年九月刊行とされていて、この資料全体ではこれが通俗読物出版社の存在を知らせる時間的に最も早い記録である。しかし五二年の刊行物点数は非常に少なく、本格的に通俗読物出版社の出版物が多くなるのはやはり五三年以降のことである。楊百鏞の回想での記述も考え合わせると、同社の本格的な創設時期は一九五三年と推定してよいのではないだろうか。この出版社が成立するまでの細かな事情については後に触れることにして、ここでは特に人民文学出版社との業務範囲の相違を明らかにしておくこととする。

人民文学出版社と通俗読物出版社の管轄範囲については、「出版総署関于通俗読物出版社方針任務的通報」(一九五四年三月二日)⁽¹⁶⁾に詳細な規則が定められている。この通達の中で、通俗読物出版社の具体的な経営項目が示されると同時に、他の出版社と業務が重複しないよう、職務範囲の違いについて原則的なガイドラインが表明されている。それによれば、通俗読物出版社の扱う範囲は「二千字以上(つまり掃盲識字学習修了程度)の通俗書籍」、初級中学程度の教養を持つ労働者、農民、兵士や基層幹部が読者として推定できよう。

出版物の内容については(一)社会科学基礎知識、時事政治政策法令に關してのわかりやすい解釈本(二)言語学習、

歴史地理分野の常識についての通俗的読物、(三) 自然科学の常識的内容についての通俗的読物、(四) 通俗文芸書籍、以上四種類の通俗読物を編集出版することが該社の経営方針として示されている。これに対して人民文学出版が扱うのは「中級以上」の出版物であり、通俗読物出版社は「初級を主とし、中級にも配慮すること」と両社の間には緩やかな境界が引かれている。

前述のガイドラインにそって考えれば、文芸書の出版よりは、むしろ政策の絵解きとしての通俗読物を出版する事がこの出版社の中心任務であった。先に示した『農業生産互助合作教材(修訂本)』などはその例であろう。政治経済や科学の分野にも多くの書籍が通俗読物出版社刊行として上げられている。宣伝が中国共産党にとつて結党以来の重要事業であるのは言を待たないが、建国直後のこの時期、特に農村の末端にある幹部、所謂基層幹部にまで、政策を徹底するために、こうした政策施行のためのハウツー本への需要は殊に強かつたようである。繰り返し行われる基層幹部の政策学習や一般大衆への知識の浸透のために、そうした情報をわかりやすく語り、又読者の方も進んで手にとりたくなるような通俗本を迅速に編集、出版、配本することが、建国初期の出版界に対する大きな要求の一つであった。こうした読物の不足、或いは劣悪な品質への不満と改善要求は、当時出版行政に関係した上級幹部の視察報告でも触れられている事実である。重大な中央の政策が地方ごとと異なる解釈をされる事への懸念、或いは当時まだ幅をきかせていた、旧時代遺留の封建的な内容の通俗読物が大衆に思想的な悪影響をもたらすことを防ぐために、中央に国家級の通俗(文芸)出版社設立への要求が高まる。前後の事情から「通俗読物出版社」はこうした中央宣伝部の意を受けて設立されたと推測される。

趙樹理が『三里湾』刊行を委ねたのは成立間もないこのような出版社であった。先に引いた経営項目のなかでは文芸書の扱いがかなり低位に位置付けられているが、実際に『繪書目』を見てみると、「掃盲叢書」と銘打って様々な初歩的な文芸書を出していることがわかる。出版社が打ち出していた通俗性は、価格や造本にも明確に現れており、例

えば一九五五年に同社が出版した通俗読物の多くは一元以下と廉価で、ほとんどに挿絵が添えられていた。本というより小冊子とでもよぶべき体裁であっただろう。こうした読物と比べて『三里湾』は当時の大衆にとってかなり高級な本であったに違いない。目録上でも「中国大衆文学・通俗文芸」ではなく「中国小説」に分類されているし、前掲のガイドラインを盾にとつて、人民文学出版社がこの版權を譲らないことも十分にありえたのである。しかしながら、この小説はやはり通俗読物出版社からだされた。挿絵入りの通俗小説として。

【五】 通俗文芸の発展と消長

一、新たな出版システムの下で

以上のような考察を経て、人民文学出版社と通俗読物出版社は当時の文芸出版界における二大潮流をそれぞれ象徴する出版社であったことが、おぼろげながら浮かび上がってきた。そして『三里湾』の出版は、その二つの潮流がぶつかりあう渦中にあつたともいえる。

新たな革命叙事を紡ぐと同時に、既成文学者の過去の作品にメスをふるい、あくまでも正統な歴史観にそつた作品だけを拾い出す。人民文学出版社は、言い換えれば文学における正史を編みだす場であつた。読者の需要と出版社の利益を前提とした市場主義的な商業出版とは異質の、社会主義体制下におけるこのような文芸出版流通システムの成立過程を錢理群は丁玲の『太陽照在桑乾河上』出版の経緯を丹念に辿りながら検証している。⁽¹⁸⁾

土地改革が進行する農村での経験を基に描き出したこの社会主義リアリズム長編小説は、実際には様々な紆余曲折を経て世に出された。草稿や原稿の時点で、丁玲は当時華北地区文芸界の責任者だつた周揚をはじめ、毛沢東の政治秘書だつた胡喬木、哲学者の艾思奇、詩人の蕭三といった党内の代表的知識人に政策的に問題がないかを確認しながら出版を打診し、どこからも明言が得られないまま一旦はこれを諦めかける。ところが、思いがけない毛沢東の鶴の

一声で出版は突然すんなりと決定されたという。

このように一冊の本の出版が、読者の嗜好や出版社の採算性などとは全く無関係に、党の幹部たちの政治的判断、最高権力者の意思によって決定されたという事実から、銭は出版市場は消滅し、「文学芸術は既にまさしく『党の事業』の一つの重要な部分⁽¹⁹⁾」を占めるに到ったことを指摘している。

他方、「通俗読物」は、従来から低識字層に向けられた宣伝媒体として機能してきた。劇や曲芸など一過性のものが大きな役割を果たしていた抗戦、内戦期と異なり、五十年代に「読物」が重視された背景には、当時農村で広範に行なわれていた「掃盲運動」により農民のリテラシー獲得が進んでいたことが一つの理由としてあげられる。基層幹部が、上級から伝えられる政策の内容を、わかり易く、繰り返し参照するための政策補助教材として通俗読物への需要は大きな高まりを見せていた。農業集団化や反革命分子粛清のような、新たな概念を伴った運動が起こるたびに、こうした読物は学習のテキストとしても利用されたのである。もちろん文芸読物は直接的にはこのような目的を助けるものではないが、リテラシー獲得への補助的道具として、又平易な文章の中に革命の正当性を支える記号を盛り込んだテキストとして、ナイーブな読者の意識下にそった宣伝を刷り込む一助ともなっただろう。

このように人民文学出版社と通俗読物出版社とは互いに当時の知識人、一般大衆とその対象を異にしながらも当時の社会全体に政策宣伝を推し進め、社会主義体制下の新たな文化を構築する役割を担っていた。趙樹理自身はその作品が『人民文学』に掲載され、通俗読物出版社から単行本が出版されたという事実がいみじくも物語るとおり、そのあわいを行く表現者であった。しかし趙樹理がその中間的な立場から、通俗の方向へと踏みだし、それが大きな波紋を起すことなく、むしろスムーズにことが運ばれた背景には、五三年ごろに始まり、五五年から五六年に強力に推進されたこうした農村通俗読物普及への中央政策レベルでの後押しが間接的に働いていたとは考えられないだろうか。

二、建国後通俗文芸の始まり

建国直前の一九四九年九月二九日に開かれた第一回政治協商會議共同綱領の四十九条の後半には以下のように記されている。

發展人民出版事業、併注重出版有益于人民的通俗書報。

人民の出版事業を發展させ、ならびに人民に有益な通俗書籍、新聞の出版を重視する⁽²⁰⁾

報道の自由と共に出版事業、特に一般人民に利するための通俗書籍の出版に注力することを謳う内容である。まず、一九四八年八月北京に全国の出版機構を統一管理する機関を設けるため、各地から代表者が集まり、翌年二月には出版委員会が設置された。ここで建国後の出版工作に関わる様々な準備がなされる。これまで各地の出版社で印刷されてきた出版物の版本を統一すること、国内各都市に残る私営出版社、書店との協業、或いは接収の検討など、この出版委員会が建国初期の出版事業の骨格が決定されることになる。

四九年十月にこの出版委員会が発展して出版総署が設立され、宣伝部の下にはいり、当時新聞総署の責任者だった胡喬木がこの出版総署の責任者を兼任することが決まった。さて一九五〇年出版総署党小組會議報告では、通俗書籍の価格面や、普及方法にまで配慮して、「読む本が読者の手に届くように」と価格面での補填までが話題として上っている⁽²¹⁾。

一九五二年に入ると当時まだ存在していた私営の中小出版社の出す通俗本の内容が問題視されるようになるが、この時点では未だ一方的な批判が行われず、かなり寛容な裁定が下されている。例えば「出版総署関于処理『李鳳金』等連環画問題給上海市新聞出版處的通知⁽²²⁾」では表題の連環画を含めた通俗本六冊の内容についての問題点を指摘し処

理を求めるが、出版総署はその訴えにたいし、六冊の内の一冊「李鳳金」については、その内容に問題はあるもの、それほど厳格に処理するにはあたらないと指摘、発売停止や、内容変更を求めた軽率な批判に注意を促している。内容を詳細に検討した上で処理する、冷静な判断がこの通知からは読み取れる。

しかし三反五反運動を経て、一九五三年には出版界でも各所で大幅な調整が行われた。特にその年の初め、出版物の農村部への強制割り当て事件（いわゆる「強攤」⁽²³⁾）が明るみに出た事がきっかけで、出版総署副署長の陳克寒による長期にわたる華東・中南地域への実態調査が行われる。「陳克寒検査華東、中南出版工作致有關部門及負責人的信」（一九五三年三月二十五日至四月二十三日）は足掛け一か月にも及ぶ出版市場調査の報告として、様々な問題点や提言を述べているが、中でも重視されたのが通俗書籍の問題である。

出版物的思想性差、内容公式化、読之乏味。以宣伝婚姻法的書籍為例、讀者一言破的：「無非說的老舊婚姻不好、新婚姻好。」至今沒有一本書、提高到社会制度方面、進行思想理論的分析。這樣的宣伝教育是極不深刻的。

出版物の思想性が劣っており、内容は公式化していて読むに耐えない。婚姻法を宣伝する書籍を一例としてあげると、読者は一言「こう断言する。「古い婚姻は悪いというのでなきや、新しい婚姻は良いといっているものだ。」それ以外、今に至るまでも社会制度や思想の理論的分析にまで踏み込んだ本は一冊も無い。このような宣伝教育は全く深みが無い。⁽²⁴⁾

我們不重視報刊書籍的質量、而讀者有眼睛的。華東、中南兩地報紙、雜誌發行的昇降表顯示：辦地不好的都下降了、而真正質量的可以穩住、甚至供不應求。

我々は新聞雑誌や書籍の品質を余りにも軽視しているが、読者は見る目をもっている。華東、中南両地方の新聞、

雑誌発行部数のグラフがそれをよく示している。うまくできていないものは、皆減っているし、できの良い物への需要は安定し、供給の追いつかないものさえある。⁽²⁵⁾

これらの発言の根底には、読者大衆への一定の理解と評価があり、通俗読物の多様性を肯定し、改良を目指す意識が当時の出版人の内にあったことの一つの証左とも言えるだろう。一方で私営出版社の版權無視、商売一筋のあくどいやり方に対しては、厳しい批判を向けており、こうした私営出版社が建国初期にはむしろ増加していることへの懸念が生じている。五二年までに見られた緩やかな出版管理が、管理強化へと転換するのはこのあたりであろうか。国営出版社の通俗出版軽視の状況に乗じて私営出版社が俗悪な出版物を大量に販売し、大衆の思想や、国営出版社の経営に悪影響を与えていることに警鐘を鳴らしたこの報告は、中央宣伝部をも動かし、当時宣伝部で出版行政を担当していた胡喬木はこの報告を高く評価している。⁽²⁶⁾

一九五三年半ばの通俗読物出版社の創設は、时期的に見ても、こうした状況に起因するものと思われる。大手私営出版社は、この時期教科書などの大きな需要が全て国営出版社に独占されたため、経営が行き詰まり、私営企業数社の連合経営から、次第に国営との「公私合営」の道へと選択肢を狭められていた。⁽²⁷⁾ また前掲の報告を別の角度から読めば、中小の私営出版社が通俗読物を武器として、しぶとく生き残ろうとしていたらしいことも推察できる。そうした状況への危機感が党の出版関係者をして国家一級通俗出版社設立へと向かわせたのだと考えられよう。

三、出版の独占化と通俗文芸の衰微

ところで、翻ってみれば趙樹理の通俗、大衆作家としての原点をさす言葉、「文壇作家にはなりたくない。私はそれより文攤の作家になりたい。そうして封建的な読物の陣地を一步一步奪い取りたい」は当時のこの通俗読物を取り巻

中国大衆文学・通俗文芸出版点数表

	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	合計
武汉通俗出版社		5	13	1									19
商务印书馆		1											1
山东新华书店	1	10											11
四联书局						9							9
工人出版社			1	1	3	4		1					10
人民文学出版社				1	31		15						47
通俗读物出版社					1	42	24	71	16				154
华北人民出版社				1	4	5							10
天津通俗出版社					3	3	1						7
天津人民出版社									2				2
群益书局		2	1										3
华东人民出版社				1	1	1							3
新文艺出版社						1		1	1	1			4
河北人民出版社			10	3	4	5	1	6	3	10	7	2	51
山西人民出版社					8	7		3	10	5			33
辽宁人民出版社						5	1	10	7	44	1		68
东北人民出版社		1			4	8							13
西北人民出版社		1		1	6	4							12
西北新华书店		2											2
山东人民出版社		6	13	8	12	15	1	32	9	2	1		99
江苏人民出版社					16	12	6	69	11	12	1		127
江苏文艺出版社											20	4	24
苏南人民出版社			3	11									14
浙江人民出版社							2	10	3	11			26
福建人民出版社					3	2	5	8	5	15		3	41
湖北人民出版社						8				20	18		46
中南文艺出版社					10	5							15
中南新华书店		3											3
中南人民出版社			6										6
甘肃人民出版社			1	4	6			2	2				15
湖南人民出版社						2	1	11	12	35	2	2	65
湖南通俗读物出版社			3	3	3	2							11
河南人民出版社					13	8		10		2	2		35
江西人民出版社					2	6	2	8	8	16	21	1	64
江西通俗出版社			1	3	2								6
广西人民出版社				1	3	2		1	2		5		14
华南人民出版社					6	2	1						9
南方通俗出版社			8	8	10	4	3						33
四川人民出版社					3	3	7	10	1				24

	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	合計
四川民族出版社												2	2
川北人民出版社				1									1
川西人民出版社				1									1
陕西人民出版社							1	10	3		21		35
云南人民出版社					3	8		11	2	2	8	4	38
重庆市人民出版社				1	5	4		2	2				14
贵州人民出版社			1		3	1	1	2		2			10
西南工人出版社				1									1
上海文化出版社							7	93	49	23			172
通俗文艺出版社							2	28	26	3			59
中国青年出版社							3	3					6
新中国妇女社							2						2
中国电影出版社								1			4		5
北京文艺出版社								7	49	6	1		63
北京大众出版社								1					1
上海人民出版社								26	1	5	1		33
上海人民美术出版社								1			3		4
上海教育出版社										56			56
黑龙江人民出版社								2	2	21			25
广东人民出版社								9	3		6		18
新疆青年出版社								1			2		3
新疆人民出版社									2		1		3
新知识出版社									1				1
吉林人民出版社									2	28	1	3	34
长安出版社									1		1	1	3
东海文艺出版社									2	1	1	1	5
安徽人民出版社									1	7	9		17
作家出版社										12	12		24
文字改革出版社											1		1
建筑工程出版社											1		1
群众出版社											1		1
中华书局											1		1
春风出版社											3	25	28
抚顺人民出版社											2		2
无锡人民出版社											5		5
扬州人民出版社											1		1
扬州市人民出版社											1		1
盐城人民出版社											1		1
浠水人民出版社											2		2
合計	1	31	61	51	165	178	86	450	238	339	168	48	1816

く情況と重なるように思える。趙樹理は建国後大衆文芸創作研究会を發足させ、丁玲等文協グループとの間に摩擦を生じながらも、一貫して通俗化の道を歩んできた。大衆文芸創作研究会の成立大会で彼は以下のような発言をしている。

我們号称為人民文芸工作者、很慙愧、因為人民併未接受我們的東西。廣大群眾願意花錢甚至站着去聽那些旧東西、可見它是能吸引住人的。它的内容多半是以封建体系為主……

我々は人民文芸工作者を称しているが、慙愧に耐えないことに、人民はまだ我々のものを受け取っていない。多くの大衆は喜んでお金を払い、立ち見でも古臭いもの（北京天橋で演じられている旧式の曲芸を指す*引用者注）を聞きたがる。それはよほど人を惹き付けられるのだろう。その内容の過半は封建体制を主としたものである……⁽²⁸⁾

大衆の好む形式で、その鑑賞能力と方式に合わせて新たな時代の思想を伝え、社会に横たわる問題を解決すること、彼はそれを自らの「文攤作家」としての使命の一つと考えていた。ところが、趙が自らのペンで一步一步解決しようとしていたこれらの問題を国家権力は政治制度によって一掃しようとはかる。一九五二年から出版社の登録認可制度が導入され、⁽²⁹⁾続いて販売部門の取締りが徐々に強化され始める。

次に大手の私営出版社は先にも述べたが、大きな収入源としての教科書の出版権を失い、⁽³⁰⁾苦しい経営を迫られる中で次々と公私合営の道を選択する。その後急激な社会の変化の中でこれらの出版社は国营化が進められた。⁽³¹⁾建国以前には自社内に、編集、印刷、発行、そして最終的には販売も行なう書店を抱えた総合出版社だった商務印書館や中華書局は、国营後にはその書店機能を排除され、書籍販売は次第に国营の新華書店一社に絞込まれる。こうして販売ルートを掌握し、独占することで、生き残っていた中小私営出版社の出版物の販売所を奪い、ひいては消滅に追い込んだ。⁽³²⁾ここに於いて出版は完全に国家の手に掌握された観がある。この過程についてはいずれ稿を改めて詳しく論じてみた

いと思うが、再び通俗読物の世界に立ち戻るとそこにも又大きな変化が読み取れる。

別表はこれまでも触れてきた『総書目』の「中国大衆文学・通俗文芸」欄の出版点数を一九四九年から一九六〇年まで年度別、出版社別にまとめたものであるが、五七年以降の量的な減少はそこから看取されるとおりである。質的にも読者の欲求に配慮したパラエティ豊かな品揃えは無く、政府の文化的価値に則った健全で、必要なものが提供されているのみという印象を受ける。

通俗読物出版社の名称もまた五八年の『総書目』から消え去っている。資料によれば人民出版社に併合されたところが⁽³³⁾、詳細は不明である。『三里湾』の出版がきっかけで趙樹理の知遇を得た楊百鏞は、その後趙の紹介もあって老舍、張恨水等の協力をも取り付け、彼等を中心に『大衆文学』という新たな雑誌の刊行を計画していたが、反右派闘争のあおりでこの企画は消滅してしまふ。⁽³⁴⁾

その四年後、六二年の『総目録』からは「大衆文学・通俗文芸」という分類自体がそのままそっくり消え去っている。建国後わずか十年のあいだのこの急激な変化は、その読物の主対象とされた基層の幹部、農民を巻き込んだ農村の大変革と恐らく無関係ではないだろう。

五十年代の農村では幾度かの高潮と停滞を繰り返しながら農業集団化運動が進められた。通俗読物の供給が最高潮に達した五五年から五六年は又農村で急激に高級合作社への組織化が進められた時期に重なる。⁽³⁵⁾この大規模な変革期に農村部での「通俗読物」の迅速な配本とその内容の充実が厳しく要求されたことは偶然ではないし、その求める内容も五三年頃と比較して大きな変化が現れている。⁽³⁶⁾建国初期にはまだ見られた内容への配慮を置き去りにしたまま、完成されたその編集・出版・配本のルートによってこれらの読物は農村へと流れ込んでいったのである。

【六】「目録」の物語るもの——結びにかえて

『三里湾』の出版を一つの起点として、その背後にあった建国後の通俗文芸の興隆と消長の流れを大まかに見てきたが、筆者が注目してきた目録中の「大衆文学、通俗文芸」の欄が六一年を最後に消滅してしまったことは前述したとおりである。

五十年代の通俗文芸を考えるために、今回一九四九年から一九六〇年までの十一年間の『総書目』を通覧し、まず量的な変化を把握することに努めた。しかし、この期間「通俗文芸、大衆文学」の欄は出版点数に変化が認められるだけでなく、その枠組み自体が操作されていることは明らかであろう。我々は目録や分類に対してある種の権威を感じ、それを所与のものとして考えがちであるが、このジャンルの扱いに関しては、分類の設定においても、その変遷においてもそれは完全に恣意的な意図に導かれているようである。

通俗読物の興隆が当時の農村政策と不可分のものであったということは既に述べたが、そうした農村集団化が完成をみて以降、五九年の『総書目』では「大衆文学、通俗文芸」というそれまでの項目名が、何の断りも無く「通俗文芸」に変えられている。出版点数は尚減少し、そしてその三年後、一九六二年の『総書目』には「通俗文芸」すら完全に消去され、「革命闘争回憶録」「公社史、工場史等」へとすりかわっているのである。それはさながら様々な本が整然と並べられた本屋から、一部の本が書棚ごと無くなるようなものだ。

『総書目』中の分類法については、時代によって細かな点で変化はあるが、五五年の分類を例にとると、その頂点には(一)マルクス、レーニン、スターリン著作と伝記、そして(二)毛沢東著作と伝記があり、最後尾にあたる十九番目に総合参考書籍が位置付けられている。それが新中国の文化的ヒエラルキーそのものであることは一目瞭然といつてよいだろう。分類がこうした「思想」を持つその世界観は、ある意味で清末以前の知識人たちのそれと奇妙な相似

を見せる。儒教の經典を頂点にその知的枠組みを構築してきた伝統的知識人の思考形態が、共和国建国後の新しい社会の中に浮かび上がってくるとは皮肉ではないだろうか。

本稿は趙樹理の『三里湾』に関わる二つの出版社の関係を明らかにし、その中から当時の中央宣伝部が注力していた「農村通俗読物」の実態や当時の農業政策のもとで発展した通俗文芸の歩みについても概観した。五二年の陳克寒報告に見られた民衆への理解を背景とした通俗文芸重視に始まり、趙樹理等を巻き込んだその高潮期を経て、農業集団化と歩調を同じくし純粹な宣伝の具と化していくまでのその様子はまさに、「共産党の政策を民衆に宣伝啓蒙し、民衆の要求を党に伝える」双方向性をもったメディアが「政策宣伝の機能のみが重視され、後者の役割は等閑視」³⁷される過程であると言えよう。錢理群が指摘したように、丁玲や周立波のように作家が自覚的に政策に沿った作品を発表しそうした時代を生み出しただけではなく、通俗読物出版社設立などの様々な施策によってそうした傾向が政策的に作り出され、結果的に重層的でより堅固な文化構造が完成された。逃げ場の無いこの堅牢な社会システムは、その後起こった文革を不可避的なものとした一因とも言えるのではないだろうか。

趙樹理の『三里湾』はこうした建国後の文芸界、出版界の流れの中で分水嶺ともいうべき作品である。この作品の成立背景を含め詳細に論じた加藤三由紀は「『三里湾』は、趙樹理にとって、又、中国農村の集団化の歴史においても、一つの節目となる時期に発表された作品として位置づけられる。」とし、又「彼の思想と党の農村工作の歩調とが、基本的に一致していた時期の最後の作品」と述べている。³⁸筆者も又この見方に同意するが、付け加えるならばこの作品は又趙樹理の「通俗文芸」観と、党の通俗文芸政策が幸福な一致を見ていた最後の時期に生まれたものであるとも言えるだろう。

この時期に通俗文芸が重視された理由については、既に本論で述べてきたとおりだが、掃盲運動の進展と共に農民のリテラシー獲得が進み、文化的要求が高まっていた事、それ以上に社会主義新国家の建設という抽象的な概念を行

き渡らせるため、繰り返し行なわれた政治学習のテキストとして用いられたことが最大の要因としてあげられよう。海峡を隔てた台湾との緊張、朝鮮戦争への義勇軍出兵など、建国間もない内に数々の不安を抱えた新国家は、まだ完全に掌握し切れていない農村部の基層幹部や村民をメディアを通じて教化し、組織化しようとしていた。

そして又出版機構を完全に掌握しようとする国家が様々な方策を巡らしていたこと、それが当時の文芸界、出版界にどのような影響を与えていたのかなど、興味は尽きないが、紙幅の関係で今回は深く掘り下げることができなかった。趙樹理の『三里湾』をきっかけに始まった「通俗読物」世界の探索は引き続き今後の課題としたい。

注

- (1) 王中青「太行山人民的兒子」丁玲、巴金等著『作家的懷念』四川人民出版社一九七九所収
- (2) 楊百鏞「憶趙樹理」(『趙樹理研究』一九九〇年第四期所収)の以下のような記述による。
「您的小説很受工農兵喜愛。『三里湾』發表後、是否願交給我們出版？」他有些為難地回答：「這件事(指出版)、(樓)適夷同志已經說定了、你們早來就好了。」(樓適夷當時是人民文學出版社社長)
- (3) 杜鵬程「保衛延安」(定価一、六五元、五十三万五千七百部)同年同月に出された丁玲『太陽照在桑乾河上』は二十九万部である。
- (4) 杜鵬程「雪峰同志和「保衛延安」」(包子衍、遠紹發編『回憶雪峰』中国文史出版社一九八六所収)二六六頁—二六七頁
- (5) 樓適夷「零零碎碎的記憶—我在人民文學出版社」(適夷散文選)人民文學出版社一九九四所収
- (6) 王士菁「一個無私的忘我的人」(包子衍、遠紹發編『回憶雪峰』中国文史出版社一九八六所収)二四〇—二四二頁
- (7) 注(5)前掲書 五五一頁
- (8) 趙樹理「回憶歷史、認識自己」(『趙樹理全集』五 北岳文芸出版社二〇〇〇以下『全集』とする)三七八—三七九頁
- (9) 蘇春生「從「通俗化研究會」到「大眾文芸創作研究會」—兼及東西綵布胡同之爭」(『趙樹理研究通訊』第八期)丁玲の言葉として引用した部分は以下の通り。

丁玲在会上講話、首先肯定大眾文芸創作研究會作了不少工作、干了很多好事、但也給人民群眾帶來一些不好的東西、我們不能

以量勝質、我們不能再給人民窩窩頭了、要給他們面包喫。

- (10) 馬烽「談大眾文學」在「中國大眾文學學會」成立大會上的講話」『馬烽文集』八卷 大眾文芸出版社 二〇〇二 一三三頁
- (11) 董大中「東西総布胡同會議」(『文匯讀書周報』一九九八年八月一日所載)
- (12) 注(2) 前掲資料
- (13) 注(2) 前掲資料
- (14) 「中宣部關於中央通俗讀物出版社如何成立等問題電復陳克寒的詢問」(一九五三年四月八日)『中華人民共和國出版史料』五(以下「出版史料」とする) 二七〇頁
- 中國出版科學研究所、中央檔案館編『中華人民共和國出版史料』(中國出版科學研究所、中央檔案館編 既刊一〜八 中國書籍出版社一九九五〜二〇〇二)は出版総署と中央宣傳部等の間で取り交わされた出版社・出版物の流通、販売問題に関する建議や、批准された文献の中でも重要なものを集め編年整理した史料であり、当時の出版政策や、實際の施策を辿ることができる貴重な記録である。
- (15) 文化部出版事業管理局版本圖書館「全國總書目」(一九四九〜五三上下)中華書局出版一九五五「但し参考としたのは龍溪書舎の影印本『中國書籍總目錄』一九八一。(以下各年度の「總書目」とする。)
- (16) 『出版史料』六 一五二〜一五四頁
- 一、通俗讀物出版社和人民、人民文學等出版社的分工、按中級以下和中級以上的原則劃分、即通俗讀物出版社的業務範圍限于經營中級以下的通俗讀物的出版(以初級為主、兼顧中級)
- (17) 「陳克寒檢查華東、中南出版工作致有關部門及負責人的信」(一九五三年三月二十五日至四月二十三日)『出版史料』五 一三八〜一七〇頁
- (18) 錢理群「新的小說的誕生」(『一九四八—天地玄黃』山東教育出版社、一九九八、所収) 尚本書は建國前夜に始まる共産黨の文芸政策推進と文學者たちの反応について論じている。詳しくは拙文(書評)「『文學史』言説への新たな挑戦——一九四八—天地玄黃」(『東方』二四三号 一九九一、五)を参照されたい。
- (19) 注(18) 前掲書 一九六頁
- (20) 第一屆中國人民政治協商會議共同綱領 第五章文化教育政策

- (21) 「出版総署二ヶ月工作簡報」一九五〇年一月二十六日「但工農大眾和一般幹部依然買不起書。因此我們正在計畫对于通俗讀物的一般幹部讀物、提出一部分、由政府補貼、以極低廉價格配售。」(『出版史料』二 六三頁)
- (22) 「出版総署關於『李鳳金』一書不必停售修改給上海市新聞出版処等的通知」一九五二年六月一日(『出版史料』四 六二頁)
- (23) 「出版総署關於堅決糾正書刊發行工作中強迫攤派錯誤的指示」一九五三年一月三日(『出版史料』五 一〇五頁)
- (24) 「出版史料」五 一四九頁
- (25) 「出版総署党组關於檢查華東、中南、華北、北京工作的情况給政務院文委併中央的報告」一九五三年五月『出版史料』五 一八一頁
- (26) 本報告の欄外に付された原注は「胡喬木批、此報告很好、請登『宣教動態』」としている(『出版史料』五 一六二頁)
- (27) 「出版総署与中華書局商談加強對中華的領導問題的紀要」一九五三年十一月十六日(『出版史料』五 六〇七—六〇八頁)
- 「出版総署、中華書局董事會關於中華書局全面公私合營問題第一次會議紀要」一九五四年一月十五日(『出版史料』六 三八頁)「出版総署關於商務印書館實行全面公私合營的要求的批復」一九五四年一月二十九日(『出版史料』六 六一頁)など、五三年後半から五四年にかけて合営化の動きが加速している。
- (28) 趙樹理「在大眾文芸創作研究会成立大会上的講話」(『全集』四、一八七頁)
- (29) 「出版総署發出、關於執行『管理書刊出版業印刷業發行業暫行條例』和『期刊登記暫行弁法』的指示、的通知」一九五二年九月四日(『出版史料』四 一七三—一七七頁)
- (30) 藤井省三「魯迅『故郷』の読書史—近代中国の文学空間」(創文社一九九七) 第二部 教科書の中の「故郷」を参考にした。同書同部には新規教科書の發行が新たな出版社成立の契機として働いた過程が示されており、「当時の出版社にとって教科書がいかに魅力的な市場であったかが想像できよう。」(七四頁) という指摘は興味深い。
- (31) 「發行工作者為貫徹過渡時期總路線而奮闘」一九五三年十二月三日(『出版史料』五 六三五頁) の中で胡愈之は五四年一月一日を以って、中国図書發行会社が新華書店に併合されることを述べ、その意義について講話を行っている。これは事実上、出版物販売部門の独占化につながるものであった。
- (32) 「胡愈之關於發行工作貫徹總路線問題給陳克寒的信」一九五三年十二月八日(『出版史料』五 六四四—六四六頁) は、注(30) の内容に関連して最終的に書籍の自由市場を消滅させる事が社会主義改造の最も有効な手段であると示唆している。

- (33) 田耕、武鳳蘭「新中国建立后国营与公营出版单位社名消失情况」(『北京出版史志』十六、一二九—一三六頁(北京出版社二〇〇〇))では「通俗读物出版社、一九五三年在京成立、出版本版圖書、后併入人民出版社。」と記されている。
- (34) 注(2) 前掲資料。また、張桂興編選 中国現代文学史資料叢書(甲種)『老舍年譜・下冊』上海文芸出版社一九九七、六九三頁一九五七年六月一九日に「与趙樹理、張恨水等聯名邀請在京文芸工作者和有關人士沈從文、鐘敬文、李長之、姚雪垠、邵荃麟、艾青等一〇〇多人举行座談会、就繁荣大衆文芸、創辦『大衆文学』雜誌等問題交換意見。」との記述がある。
- (35) 農業集団化の進展については、小林弘二「二〇世紀の農民革命と共産主義運動」(勤草書房一九九八)の「第三章 農業集団化の加速と社会主義化の実態」を参考にした。同書同章は一九五三年と一九五五年に特にその運動が加速された背後の事情について詳細に論じている。
- (36) 「関于加強農民通俗读物出版發行工作的請示報告」(一九五六年一月二三日「中央宣传部印發関于加強農民讀物的出版和發行工作向中央的報告的通知」一九五六年四月十九日(『出版史料』八 十二—三三頁)は当時の農村合作化運動の進展にあわせて農村文化建設を謳っているが、実際には集団化についての学習教材の迅速な配本を強化させようとするのみで、その内容への詳しい言及はない。
- (37) 藤井省三／大木康『新しい中国文学史』(ミネルヴァ書房一九九七)二〇一頁九—十二行
- (38) 加藤三由紀「『三里湾』評価をめぐる問題」(『お茶の水女子大学中国文学会報 第四号 一九八五』九八頁十四—十八行)